

鵲について —平安詩歌を中心に—

田 中 幹 子

漢詩文と和歌との関わりについて考える上で、「鵲」は素材として適当なものと思われる。

蔵中スミ氏は、漢詩と和歌に詠まれた「鵲」を、次の和歌に代表される「月」と組み合わせられた例と、「七夕」伝説の鵲の橋として詠まれた例に分類された。⁽¹⁾

鵲の峰飛び越えて鳴きゆけば夏の夜渡る月ぞ隠るる

(後撰 夏 207⁽²⁾)

鵲の渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける

(新古今 冬 620)

本稿では、蔵中氏の分類を基にして、平安時代の詩歌に詠まれた「鵲」を見直してみた。その結果は次のようにまとめられる。

I 「鵲」と「月」が組み合わせられる背景には、二つの漢籍がある。

〔1〕「破鏡」説話

〔2〕魏武帝「短歌行」

II 「七夕」伝説の「鵲の橋」には、三つの特徴がある。

〔1〕天上世界として賛美

〔2〕白さ

〔3〕「霜」との組み合わせ⁽³⁾

「鵲」は、「月」「七夕」という別々の主題の許で詠まれ、やがて同じ詩歌の中で詠まれていく。具体的に「鵲」が詠まれている作品を読解していきながら、I・IIのまとめに至った過程を述べていきたい。

二

まずIについて考えていきたい。「鵲」が「月」と組み合わせられる背景には、「破鏡」説話と魏武帝「短歌行」という漢籍がある。この二つは源流を異にしているのではない。魏武帝「短歌行」は「破鏡」説話の受容の一つのあり方なのである。「短歌行」はやがてそれ自体が「鵲」の詩歌の典拠となっていく。蔵中論文では「破鏡」説話については、触れていない。しかし「破鏡」説話は、「短歌行」の源流の説話であり、「鵲」と「月」の組み合わせを考える出発点である。まず「破鏡」説話の受容から考えていきたい。「破鏡」説話とは次のようなものである。

① 「神異経」

神異経曰、昔有「夫婦」、将「別破」鏡、人執「半」以為「信」。其妻与人通、其鏡化「鵲」飛至「夫前」、其夫乃知「之」。後人因鑄「鏡」為「鵲」安「背上」自「此始也」。

〔太平御覧〕七二七、服用部十九、鏡

概要は、仲のいい夫婦が、離れ離れになってしまいう時、互いを忘れないために鏡を半分に割って互いに身につける、その妻に他の男性が通お

うとする際、思い出の鏡は鵲に変化して、夫の前に飛んで行き、それによつて夫婦は再会できた、以来鏡の背には鵲を鑄するようになった、というものである。⁽⁴⁾

「破鏡」説話を踏まえ、次の著名な「古絶句」が作られた。

②「古絶句四首」其一、藁砧今何在

藁砧今何在 藁砧今何くにか在る
山上復有山 山上復た山有り
何当大刀頭 何か当に大刀の頭なるべき
破鏡飛上天 破鏡飛んで天に上る

(「玉台新詠」卷十)

これは謎解きになっている。第一句の「砧」は、「趺」と同義で、「趺」は「夫」と同音である。よつて第一句は「夫」を表わす。第二句は、山の上にまた山で「出」を表わす。第三句は、大刀の頭の部分にあるから「環」となり、同音で帰るの意の「還」を表わす。よつて第三句までで、出かけた夫が、いつ還るのかと待ち侘びている内容となる。その答えが、第四句目である。「破鏡飛んで」という表現から「破鏡」説話を踏まえていることがわかる。よつて、半分にした鏡であり、鏡は月に喩えらるから「月」が半分、つまり「半月の頃に帰る」の意となる。ここで「破鏡」説話が用いられているのは、月を鏡に喩えるという理由からだけではなく、「破鏡」説話の主題である夫婦愛を踏まえているからである。

この「古絶句」が平安人に受容されたことは、「扶桑集」卷七贈答部所収の小野篁の詩からもうかがえる。

③ 和 下 沈 卅 感 故 郷 応 得 二 同 時 一 見 寄 之 作 上 小 野 篁

查客来如昨 查客来ること昨の如し
寒蟾再遇円 寒蟾再び円かなるに遇ふ
三冬難曙夜 三冬曙け難き夜

万里不陰天 万里陰らざる天
漫遣刀環滿 漫に刀環をして満たしむ
空経破鏡懸 空しく破鏡が懸かるを経たり
「空しく破鏡が懸かるを経たり」とは、帰るべき時が来たのに、帰れず、半月の時を迎えたという意である。

【李嶠百詠】にも「破鏡」説話の受容が見られる。

④ 【李嶠百詠】鵲

危巢畏風急 巢を危くして風の急なることを畏れ
遶樹覓星稀 樹を遶りて星の稀なることを覓る
喜逐行人至 喜ぶらくは行人を逐ひて至ることを
愁随織姫婦 愁ふらくは織姫に随ひて帰ることを
恍遊明鏡裏 恍し明鏡の裏に遊ばば
朝夕生光暉 朝夕に光輝を生さむ

「鵲」の題で「恍し、明鏡の裏に遊ばば、朝夕に光輝を生さむ」と詠まれているので、この表現が「破鏡」説話を踏まえていることがわかる。

【李嶠百詠】には、「月」部にも「破鏡」説話からの表現が見られる。

⑤ 【李嶠百詠】月

分暉度鵲鏡 暉を分ちては鵲鏡渡る
流影入蛾眉 影を流しては蛾眉入る

「分暉度鵲鏡」が「破鏡」説話に因んだ表現である。「暉を分ちて」は、半月を意味する。

日本の月の詩にも「破鏡」説話の表現が用いられている例がある。

⑥ 【本朝文粹】卷二天象 織月賦 源英明

飛鵲猶慵 喘牛何在 飛鵲猶は慵し 喘牛何くにか在る
疎於破鏡之姿 寧見如珪之彩 破鏡の姿より疎にして 寧んぞ珪の如きの彩を見む

「織月」とは細い月の意味である。「飛鵲猶慵、喘牛何在」とは、「初

「学記」「月」の「事対」の「呉牛喘、魏鵲飛」を踏まえた表現である。「呉牛喘」とは、暑さのため呉の牛は、満月を見ても太陽を連想し喘ぐ、という説話を指す。一方、「魏鵲飛」とは、満月の中に飛ぶ鵲のことであり、次章で紹介する魏武帝「短歌行」の詩を指す。英明は、この満月の説話と詩を踏まえ、月が細いから鵲も怖いし、満月には喘ぐ牛も今は何処にいるかわからない、と詠んでいる。そしてそのような細い月に対し、半月の「破鏡」の姿よりさらに「疎」と表現している。⁽⁶⁾

和歌にも「破鏡」説話が背景となっている作品がある。冒頭で紹介した次の和歌である。

⑦ 「句題和歌」風月部 73

鵲飛山月曙

鵲の峰飛び越えて鳴きゆけばみやま隠るる月かとぞ見る
この歌とよく似たものが、『新撰万葉集』夏部に見られる。

⑧ 「新撰万葉集」下巻 夏 289・290

鵲之 嶺飛越斗 鳴往者 夏之夜度 月曾隱留
鵲鏡飛度嶺無留 鳳彩千里跡不見
蒼波一葉舟陋遊 蕩子曾不憚遮暮

この和歌は『後撰集』夏部や『古今六帖』鵲部にも採られている。⁽⁷⁾

⑨ 「後撰集」夏 207・『古今六帖』鵲 449

鵲の峰飛び越えて鳴きゆけば夏の夜渡る月ぞ隠るる

『句題和歌』本文には様々な問題があるが、本稿では⑨の『後撰集』歌は、⑦の『句題和歌』と同一であるという金子彦二郎氏の判断に従いたい。⁽⁸⁾ よって二つの和歌は「鵲飛山月曙」の題で詠まれた異文であるともみならず。

⑦ 鵲の峰飛び越えて鳴きゆけばみやま隠るる月かとぞ見る

⑨ 鵲の峰飛び越えて鳴きゆけば夏の夜渡る月ぞ隠るる

「鵲飛山月曙」という句題は、次の上官儀の詩の中の一句である。

⑩ 入朝洛堤歩月

上官儀

脈脈広川流 駟馬歴長洲 鵲飛山月曙 蟬去野風秋⁽⁹⁾

句題となった「鵲飛山月曙」の詩句の中で、重要なのは「曙」である。「曙」の文字から、千里は⑦の「みやま隠るる月」、或いは⑨の「月ぞ隠るる」という表現を思いついたと思われる。その点では、⑦と⑨の和歌は同じであるが、両者における「鵲」と「月」の関係については、表現に多少の違いが見られる。

この二首は下の句に、⑦「みやま隠るる月かとぞ見る」と⑨「夏の夜渡る月ぞ隠るる」という異同がある。両者を比較したい。

⑦では、飛んでいる鵲を月と見立てている。この見立ては直接は、②の「古絶句」の「破鏡飛上天」を典拠としている。そして「古絶句」のこの表現は、「破鏡」説話の影響を受けたものであった。よって、飛んでいる鵲を月と見立てる趣向は「破鏡」説話が基となっていたことがわかる。

⑦に対し、⑨の和歌は、鵲が鳴き渡ると月が隠れるというものである。これは鵲を直接、月として喩えてはいない。しかしこの和歌は、⑧の『新撰万葉集』にも採られており、その漢訳が「鵲鏡」という表現であることから、「破鏡」説話に基づく歌として当時は理解されていたことがわかる。⁽¹⁰⁾

⑨の和歌は「夏の夜」の語句に特徴がある。原拠の⑩の上官儀の詩は「蟬去野風秋」と風は既に秋と詠んでいたのに対し、千里はあえて「夏の夜」と表現した。

夏の夜は短い。⑩の句には、格別月が早く隠れる印象はない。⑨の「夏の夜渡る月ぞ隠るる」には夏の夜が短い故に、月の動きを速く感じる感覚が表われている。この月を速く感じる感覚は、「破鏡」説話の鏡から変化した鵲が一路、主人の許に飛んで行く疾走感と重なる。

「破鏡」説話では、「破鏡」が「鵲」となり、②の「古絶句」ではこれ

を「半月」と受容した。⑤の「李嶠百詠」「月」の「暉^{ひかり}を分ちては鵲鏡渡る」も「半月」であった。⑨の和歌も、「破鏡」説話を踏まえているから「半月」である。「夏の夜渡る月ぞ隠るる」で「半月」が沈んでいるから、これは上弦の月である。従って、満月よりは夜見ることができるのはわずかな時間である。

⑨は上官儀の「曙」から夏の夜が明けることを連想し、「破鏡」説話と結び付けて詠んだ和歌なのである。

三

冒頭のIにあげたように、「鵲」と「月」の組み合わせの受容のもう一つの柱として、魏武帝「短歌行」がある。

⑪ 短歌行

魏武帝

対酒当歌 人生幾何 譬如朝露 去日苦多
慨当以慷 憂思難忘 以何解憂 唯有杜康
青青子衿 悠悠我心 呦呦鹿鳴 食野之苹
我有嘉賓 鼓瑟吹笙 明明如月 何時可輟
憂從中來 不可斷絕 越陌度阡 枉用相存
契闊談讌 心念旧恩 月明星稀 烏鵲南飛
繞樹三匝 何枝可依 山不厭高 海不厭深
周公吐哺 天下歸心

「鵲」と「月」が詠まれている部分「月明星稀、烏鵲南飛、繞樹三匝、何枝可^レ依」、つまり月が明るくて、星はよく見えず、その中を鵲が南に飛んで、樹を三回繞るが、止まるべき枝がなくまた飛び去って行くという内容が、以後の「鵲」の詩歌に影響を与えていく。「短歌行」の月は「破鏡」説話と違い満月であるが、「月」と「鵲」の組み合わせは、やはり「破鏡」説話の受容として捉えるべきであろう。「短歌行」

はやがてそれ自体が、鵲の詩歌の典拠となっていく程大きな影響力を持つようになる。

【初学記】「鵲」部に「南飛月夜」として魏武帝「短歌行」が引かれ、先にあげた④の「李嶠百詠」「鵲」部にある「樹を遶^{めぐ}りて、星の稀^{まれ}なることを覚る」という表現も「短歌行」を踏まえている。

「短歌行」は「李嶠百詠」や【初学記】に引用され、これらによって平安人に知られたと思われる。特に【初学記】は、「短歌行」受容に大きな影響を与えたようである。後に紹介する基俊の判詞「魏鵲之文」という表現も、【初学記】の「魏鵲飛」の影響を受けている。【初学記】「月」部を改めて引く。

⑫ 【初学記】月、事対

呉牛喘 魏鵲飛

【初学記】の「短歌行」受容で特徴的なのは、事対として「月」という題で【世説新語】言語篇所収の月を見て喘ぐ呉の牛の説話と対になっていることである。この点に注目すると、平安朝の漢詩や賦の「月」を詠んだものの中には、【初学記】の直接の影響下にあるものが見られることがわかる。前節にも紹介した英明の詩を再び引用する。

⑬ 【本朝文粹】卷一天象、纖月賦 源英明

飛鵲猶慵 飛鵲猶は慵し
喘牛何在 喘牛何くにか在る
疎於破鏡之姿 破鏡の姿より疎にして
寧見如珪之彩 寧んぞ口珪の如きの彩を見む

ここに見られる「飛鵲猶慵、喘牛何在」の「飛鵲」、「喘牛」の対は、明らかに⑫【初学記】「月」「事対」の「呉牛喘、魏鵲飛」の影響である。

⑭ 【作文大体】賦月詩 紀長谷雄

皎々孤懸月 清光万里過 皎々たり孤り懸る月 清光万里に過ぐ

映軒添粉壁 臨水起金波 軒に映じては粉壁添へ 水に臨みては

金波起つ

魏鵲飛無止 吳牛喘幾多 魏鵲は飛びて止まること無く 吳牛は

喘ぐこと幾多ならむ

落輝留不得 惆悵仰織阿 落輝留め得ず 惆悵して織阿を仰ぐ⁽¹¹⁾

長谷雄の詩は、英明の賦とは逆に月が皎々と照っている。よって⑫『初学記』「吳牛喘、魏鵲飛」の表現をそのまま踏まえ、「魏鵲は飛びて止まること無く、吳牛は喘ぐこと幾多ならむ」と詠んでいる。

英明の賦や長谷雄の詩は、「短歌行」からというより、「初学記」を直接の典拠と考える方が適切と思われる。

このような類書による表面的な理解に較べ、菅原道真の受容は「短歌行」の内容を熟知したものである。

⑭ 「菅家文章」賦「葉落庭柯空」⁽¹²⁾ 373

遇境幽人意 境に遇ふ幽人の意

乘閑卒業冬 閑に乗じて歳の冬を卒ふ

—略—

遂使輕紅滅 遂に輕紅を滅たしむ

何教碎錦縫 何ぞ碎錦を縫はしめむ

破殘寒月鏡 破れて殘る寒月の鏡

來迫曉霜鋒 來りて迫む曉霜の鋒

—略—

星稀雖遠鵲 星稀にして鵲を遠らせども

花嬾未期蜂 花嬾くして蜂を期せず⁽¹³⁾

觸感孤心苦 感^{いた}びに觸れて孤心苦しむ

傷懷四面攻 懷^{こころ}ひを傷りて四面より攻む

欲催春管律 春管の律を催さむことを欲^ほひて⁽¹⁴⁾

頻待夜更鐘 頻りに夜更の鐘を待つ

「星稀にして鵲を遠らせども」という表現は、④の『李嶠百詠』「鵲」の「樹を遶りて星の稀なることを覚る」の表現を使っている。しかし道真は「李嶠百詠」の表現を単に借りたのではない。道真は「葉落ちて庭の柯空し」の題から、「短歌行」の止まる枝のない鵲を詠んだ「何枝可依」の詩句を連想したのであろう。その後に「短歌行」を踏まえた『李嶠百詠』の「樹を遶りて星の稀なることを覚る」という表現に思い至ったのである。それは「星」と「花」という美しい対を作るためであったと思われる。

このように道真が「短歌行」の内容を充分理解した上で応用しているのに対し、「和歌童蒙抄」の所載歌は「短歌行」をそのまま翻案した例である。

⑮ 「和歌童蒙抄」天部、月

月清み木ずゑを繞る鵲のよるべを知らぬ身をいかにせむ

古歌也。よるべもしらぬとは、魏武帝短歌行曰く、月明星稀、

烏鵲南飛、繞樹三匝、何枝可^レ依といへる心成べし。

『和歌童蒙抄』の「古歌」については、出典未詳であるが、この和歌は、藏中論文でも指摘されているように、「短歌行」の内容と極めて類似し、あたかも和訳したかのようなものである。⁽¹⁵⁾

次に歌合に用いられた例をあげたい。

⑯ 「中宮亮顯輔家歌合」月 七番

右

宮内大輔忠季

隈もなき月の光のさすからになど鵲のまだきたつらむ

是依「何書文」被^レ詠哉。依「分暉度鵲鏡」詠者、全非^レ月。本文

已為「百詠文」被^レ歌歟。若又依「魏鵲之文」被^レ詠者、又已乖^レ

本文之意。倩于案「文意」此二文之外無^レ別奧事一歟。未^レ聞^レ

正説「之間推以^レ左為^レ勝」。

この歌合は、長承三年（一一三四）九月十三日に行なわれたもので、

判者は藤原基俊である。この和歌を基俊は負けとした。基俊は、忠季が「鵲」の漢籍を正しく理解していないと判断したのである。基俊は「分暉度鵲鏡」、「魏鵲之文」の二つを「鵲」の典拠としている。このうち「暉を分ちては、鵲鏡度る」は、先の節で紹介した⑤の『李嶠百詠』「月」に採られていた詩句である。これは「破鏡」説話に因んだ表現で、「半月」を意味した。基俊は「百詠文」は「半月」であり、「全き月」ではないのに、和歌は「隅もなき月」と満月のことを詠んでいる、だから忠季は漢籍を誤読している、とした。

「魏鵲之文」即ち「短歌行」は、「月明星稀」と満月に飛ぶ鵲を詠んでいた。よつて基俊はこの歌に対してわざわざ「など鵲のまだきたつらむ」と詠む必要がない、これは忠季が「短歌行」を充分理解していないためであると判断している。

しかしむしろ忠季は「短歌行」の詩句を熟知していたと思われる。「短歌行」の「鵲」は、樹を繞つてもよるべき枝がないと詠まれ、この「よるべがない」という点が、「短歌行」全体の中でも根幹となっていた。忠季はこの「よるべがないから飛び去る」という内容をよく理解し、発想の典拠として、明るい月の光がさしているのに、鵲はなぜ飛び立ってしまうのだろうと詠んだのである。

改めて⑬の和歌を見直すと、忠季は千里の⑦、⑧、⑨の歌を踏まえて詠んでいることがわかる。千里の⑨の和歌、「月ぞ隠るる」という月が沈むという表現を前提として、忠季は「など鵲のまだきたつらむ」、つまり、まだ月が沈みもせず皎々と照っているのに、なぜ鵲は早くも飛び立つのだろうと詠んだのである。基俊は千里歌を念頭に置かず忠季歌を批評したということになる。

結果としては、⑬の歌は⑨の千里歌を通し、間接的に、⑩の上官儀の曙に飛び立つ鵲の影響下に生まれたと解釈できる。

四

次に「鵲」の詩歌のもう一つの分類である「七夕」伝説の「鵲の橋」について考察したい。

「七夕」伝説の「鵲の橋」とは以下のようなものである。

⑬『歲華紀麗』卷三、七夕

鵲橋已成、織姫將_レ渡。(注)風俗通云、織女七夕、当_レ渡_レ河、使二

『白氏六帖』
鵲部

淮南子 烏鵲填_レ河成_レ橋、渡_二織女_一。⁽¹⁷⁾

また『李嶠百詠』にも次のように「鵲の橋」が詠まれている。

⑮
『李嶠百詠』
橋

烏鵲填み満
烏鵲填みめてに満つべし

黄公去不帰
黄公去りて帰らず

『李嶠百詠』
鵲

喜ぶらくは行人を逐おひて至ることを

愁随織姫帰　　愁ふらくは織姫に随ひて帰ることを

このうち「烏鵲填めて応に満つべし」や「愁ふらくは織姫に随ひて帰ることを」が「七夕」伝説の「鵲の橋」を表現している。

このような「鵲の橋」は数多くの詩歌に詠まれた。代表的なものとして梁の庾肩吾の七夕詩を紹介したい。

⑪
七夕詩

庾肩吾

織女逐星移

織女は星に逐したがひて移せわる

離前忿促夜

離るる前には促せわしき夜を忿いかり

別後対空機

別るる後には空しき機にむか対ふ

倩語雕陵鵲

倩^かりて語げん雕陵の鵲に

填河未可飛 河を填めて未だ飛ぶべからず

ここでは「鵲の橋」について、「倩りて語げん雕陵の鵲に、河を填めて未だ飛ぶべからず」と詠んでいる。「鵲の橋」として一般に思い描く場面は、たくさんさんの鵲が一行になって羽根を互い違いにして橋となっているものだが、ここでの「雕陵鵲」とは次の「莊子」にある巨大な鵲のことである。⁽¹⁸⁾

②0 【莊子】山木篇、第二十

莊周遊乎雕陵之樊。觀一異鵲自南方來者。翼広七尺、目大運寸。

莊周、雕陵の樊に遊ぶ。一異鵲の南方より来る者を観る。

翼の広さは七尺、目の大きさ運寸。⁽¹⁹⁾

この「莊子」の巨大な鵲が、七夕の橋を作る庾肩吾の鵲の直接の典拠かどうかはわからないが、『身延文庫蔵和漢朗詠註抄』には、次の記事が見られる。⁽²⁰⁾

②1 【身延文庫蔵和漢朗詠註抄】

有所云、七月七日鵲一双来、嘴指交、為「漢河橋」、渡二星也。

有云、多鵲飛列並羽為橋也。私云、鵲一双為橋者、其鳥以外大

鳥歟、如何。

ここには「有所云」として、一对の巨大な鵲が天の河の橋となる説が紹介されている。但し注者も、一双の鵲では大きすぎるのではないかと疑問を呈している。ただ①9の庾肩吾の鵲は、「莊子」の「異鵲」をかりて天の河を填めたいという内容なので、巨大な一对の鵲の橋という発想も在り得る。

「七夕」伝説の渡河場面については、小島憲之氏によって漢詩と和歌の違いが指摘されている。⁽²¹⁾ 漢詩では専ら織姫が「鵲の橋」の上を麗々しく仙車を飾りたてて渡る、というような壮麗な場面として詠まれているのに対し、万葉歌では徒歩だけでなく、小舟や機のおみ木を打渡す等の現実的手段を用いたものが多い。また渡る主体も、和歌では漢詩と逆に

彦星の方が逢いに行き、織姫が訪れをひたすら待つという用例もあり、生活感に根ざすような男女の逢瀬の場面として詠まれたと指摘されている。また蔵中論文でも「七夕」伝説の「鵲」は、「月」と組み合わせられる実景的な「鵲」とは対照的に伝説の鳥として位置付けられている。⁽²²⁾ これら先行研究を踏まえた上で、「七夕」伝説の「鵲の橋」を捉え直してみたい。

五

「鵲の橋」については冒頭にまとめた次の三つの特徴がある。

「1」天上世界として賛美

「2」白さ

「3」「霜」との組み合わせ

まず天上世界の「鵲の橋」について考察したい。『大和物語』には次のような「鵲の橋」が出てくる。

②2 【大和物語】一二五段⁽²³⁾

壬生忠岑、御ともにあり。御階のもとに、松ともしながらひざまづきて、御消息申す。

「鵲の渡せる橋の霜の上を夜半に踏みわけことさらにこそとなむのたまふ」と申す。

これは、酔にまかせて深夜の訪問をし大臣を不機嫌にさせてしまった主人の苦境を、忠岑が得意即妙の和歌によって救った説話である。忠岑は、大臣家の実在の橋を「鵲の渡せる橋」と天上の橋に喩えることで、大臣に敬意を表わし、大臣の機嫌を取り結んだのである。この場合「鵲の橋」が持つ要素のうちで「天上の橋」という意が強調されている。初唐の蘇頲の詩にこれと同じ手法が見られる。

②3 奉^レ和^三初春幸^二太平公主南莊^一、応制

蘇頲

主第山門起霽川 主第の山門霽川に起ち

宸遊風景入初年 宸遊の風景初年に入る

鳳皇楼下交天杖 鳳皇楼下天杖を交へ

烏鵲橋頭敞御筵 烏鵲橋頭御筵を敞く

往往花間逢綵石 往往花間に綵石に逢ひ

時時竹裏見紅泉 時時竹裏に紅泉を見る

今朝扈蹕平陽館 今朝扈蹕す平陽館

不羨乘槎雲漢辺 羨まず槎に乗りて雲漢の辺なるを

中宗が太平公主の南莊へ行幸する際、具された喜びを「羨まず槎に乗りて雲漢の辺なるを」と天の河に在るよりもすばらしいと表現している。太平公主への賛美は、秦の穆公の女が楼上にいて鳳皇が来た故事を踏まえた「鳳皇樓」という比喩に込められている。この「鳳皇樓」の対が「烏鵲橋」であり、よって「烏鵲」と喩えることが賛美となっていることがわかる。天上世界に匹敵するという賛美なのである。

また白楽天は実際に「烏鵲橋」と名付けられた橋について詠んでいる。

②④ 『白氏文集』 登閭門一閑望

闔閭城碧鋪秋草 闔閭城碧にして秋草を鋪き

烏鵲橋紅帶夕陽 烏鵲橋紅にして夕陽を帶ぶ

②⑤ 『白氏文集』 送蘇州李使君赴郡二絶句

館娃宮深春日長 館娃宮深くして春日長し

烏鵲橋高秋夜涼 烏鵲橋高くして秋夜涼し

これらは、風光明媚な所にある実在の橋を「烏鵲橋」と名付けた用例である。天上のような美しさであるという思いを込めて名付けたのであろう。

平安人も高貴な場所と敬意を表する意味で「鵲の橋」を用いた。

②⑥ 『栄華物語』 輝く藤壺

暮を待つ雲居のほどもおぼつかな踏み見まほしき鵲の橋

また、恋しい相手に用いられた例もある。恋しいあまりに相手が天上にいるような思いがしたり、或いは相手を尊ぶあまりに「鵲の橋」を用いる例である。

②⑦ 『伊勢集』 423

心のみ雲居の程に通ひつつ恋こそまされ鵲の橋

②⑧ 『敦忠集』 6・7

やむごとなき人に

雲居にて雲居に見ゆる鵲の橋を渡ると夢に見るかな
夢なれば見ゆるなるらむ鵲はこの世の人の越ゆる橋かな

六

次に「鵲の橋」の要素のうち「白さ」に重点が置かれた受容を考察したい。

②⑨ 『能宣集』 331

一品宮のうちに奉り給ふ扇入るるれうに、銀の透箱に、白き薄物を心葉に敷き、また白き糸して、つるの形を縫はせ給て、葦手に縫はむ歌、と召すに

雲居なる鶴と見しかど鵲の橋のたよりに通ふなりけり

この和歌は、資子内親王が円融帝と乱碁遊びをして負け、その負態として扇合せがなされ、その贈り物の扇に添えられた歌である。この負態の日が七月七日であったので、和歌に「鵲の橋」が詠まれたと思われる。この場面で能宣は、帝に対する敬意を表現することを期待された。能宣は、その敬意を「鵲の橋」と喩えることで表わした。そして「鵲の橋」という表現のきっかけとなったのは、七月七日という日付とともに、「白さ」であった。この和歌は贅を尽くした白づくめの箱に入れられた歌であった。

「白さ」と「鵲の橋」が結び付くのは、天の河が白いことに由来する。天の河には、「白氣」があるとされていた。

③② 『芸文類聚』七夕

崔寔四民月令「略」或云、見^二天漢中^一有^三奕々正白氣如^二地河之波^一」
また『和漢朗詠集』『雪』部にも収められている、白楽天の次の詩句も、雪を見て天の河を連想するというものである。これも天の河が白いという前提に立っている。

③① 『白氏文集』²²² 雪中即事寄^二微之^一

銀河沙漲三千里 銀河沙漲^{いさ}三千里
梅嶺花排一万株 梅嶺花排^{ひろ}く一万株

日本の漢詩の中にも天の河を白いと表現している詩がある。『和漢朗詠集』『白』に収められている源順の詩句も同様である。

③② 『和漢朗詠集』白 800

源順

銀河澄朗素秋天 銀河澄朗たり素秋の天
又見林園白露円 又見る林園に白露の円かなるを

「素」「即ち白い天の河は、鵲の橋がかかる河であった。従って「白さ」は「鵲の橋」とも結び付く。先に引いた②の『大和物語』の「鵲の渡せる橋の霜の上を夜半に踏みわけことさらにこそ」の例も「白さ」が「鵲の橋」の表現を生み出す一因になっている。大臣の不興を買った主人の危機に、忠岑の目に映ったのは、橋に降りた真っ白い「霜」だった。忠岑は霜の白さから「鵲の橋」を連想したのである。

しかし、霜の白さと「鵲の橋」の組み合わせの例として最も知られている歌は、家持の作として知られている次の和歌である。

③③ 『新古今集』冬 620

鵲の渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける

この和歌は『新古今集』に収められた歌であるが、この時代は、白さや冬を題材に和歌が詠まれることが多い。次の家隆の和歌も同様である。

③④ 建保五年冬題歌合 冬山霜

鵲の渡すやいづこ夕霜の雲居に白き峯のかけ橋
この和歌も白さが印象的な歌である。「白さ」と「鵲の橋」の結び付きを見て気づくことは、ほとんどの白が「霜」であることである。

七

次は「霜」との組み合わせに注目し「鵲の橋」を考えたい。

③⑤ 『古今六帖』鵲 4489

夜や寒き衣や薄き鵲の行き合ひの橋に霜や置くらむ⁽²⁷⁾

③⑥ 『新古今集』秋下 522 寂蓮法師

鵲の雲の梯秋^{かけはし}くれて夜半には霜やさえ渡るらむ

③⑦ 『人麻呂集』Ⅱ 381・Ⅲ 553

鵲の羽に霜ふり寒き夜を一人ぞ寝ぬる君を待ちかね⁽²⁸⁾

③⑧ 『好忠集』はじめの冬、十月はて 308

鵲の違ふる橋の間遠にて隔つる中に霜や降るらむ

③⑨ 『好忠集』くれの冬、十二月をはり 363

鵲の行き合はぬつまの程寒みあかで別れし中ぞ悲しき

これらの和歌は、「白」という色彩より「寒さ」が印象的な和歌である。③⑧や③⑨の『好忠集』の詞書き「十月はて」「十二月をはり」に象徴されるように、「七月七日」にかかる「鵲の橋」が、なぜ初冬や晩冬の「霜」とともに詠まれるのだろうか。

このことについて考えていく際に、まず詩人や歌人が「七夕」伝説のどの部分に心魅かれたかを考えてみたい。

典型的な例として藤原不比等(史)の詩を紹介する。

④① 『懷風藻』七夕 33

鳳蓋隨風転 鳳蓋風^{しんが}に随^うひて転き

藤原史

鵲影逐波浮 鵲影波に逐^{したが}ひて浮かぶ

面前開短楽 面前短楽開^あけども

別後悲長愁 別後長愁を悲^{かな}しむ

七夕の逢瀬という楽しい時の短かさと共に、その後の別れを愁える時の長さを詠んでいる。平安朝の人々が「七夕」伝説の中で最も心打たれたのは、二人が思いを残しながら非情にも別れなければならぬ場面であった。菅原道真と島田忠臣は別れの場面に焦点を当て、鵲を効果的に用いている。

④① 【菅家文章】 346 七月七日代「牛女」惜「曉更」。各分「一字」応^お製
恐結橋思傷鵲翅 橋を結ばむことを恐^{おそ}りては鵲の翅を傷^{やぶ}らむこと
を思ふ

嫌催駕欲啞鵲声 駕を催さむことを嫌^{きら}ひては鵲の声を啞^{おし}ならしめ
まく欲^ほりす

④② 【田氏家集】 212 七月七日代「牛女」惜「曉更」。各分「一字」応^お製
銀河夜鵲墳毛晩 銀河の夜鵲は毛を墳^{うづ}むこと晩^{おそ}し

禁樹晨鵲拍翅頻 禁樹の晨鵲は翅を拍^うつこと頻^{しばしば}なり
別れの場面での「鵲」と「鵲」の組み合わせでは、特に道真の表現が
平安末の周光の詩に影響を与えた。

④③ 【本朝無題詩】 195 (七夕付後朝) 藤原周光

駕催還妬鵲声急 駕催して還^また妬む鵲声の急なるを
橋断猶猜鵲翫分 橋断れて猶猜^{そね}む鵲翫の分れたるを

一年に一度の逢瀬の後の別れの場面で「鵲」と「鵲」が組み合わせられ
て用いられる背景には、「遊仙窟」の次の詩句が影響を与えていると思
われる。⁽³⁰⁾

④④ 【遊仙窟】 張文成

詎知 詎^{なん}ぞ知らむ
可憎病鵲 夜半驚人 憎^{にく}むべき病鵲 夜半に人を驚かし

薄媚狂鵲 三更唱曉 薄媚の狂鵲 三更に曉を唱はんとは

これは「新撰朗詠集」「恋」部にも収められているよく知られた詩句である。「遊仙窟」と、「七夕」伝説とは勿論違うものであり、藏中論文ではその関係を否定しておられる。しかし麗しい女性との別れの無念さを表現する際の「鵲」と「鵲」の組み合わせは、やはり道真や忠臣に発想のきっかけを与えたように思われる。朝を告げる明け鳥である「病鵲」と「鵲の橋」の「鵲」とは、本来違うものである。しかし④④の「憎むべき病鵲、夜半に人を驚かし」という別れの辛さを「病鵲」への憎しみとして表現することは、④①の「橋を結ばむことを恐^{おそ}りては、鵲の翅を傷らむことを思ふ」と別れたくないばかりに、「鵲」の羽根が折れればよいという、別れの時を意識させる「鵲」への激しい表現に通じる。

このように平安人の「七夕」伝説の受容は、主に別れの際の緊迫した感情を詠もうとするものであった。それによって別れの辛い思いを表現してきたことを踏まえた上で、もう一度「霜」と「鵲」を組み合わせた和歌を見ていきたい。

③⑤ 夜や寒き衣や薄き鵲の行き合ひの橋に霜や置くらむ

③⑥ 鵲の雲の梯秋^{かけはし}くれて夜半には霜やさえ渡るらむ

③⑦ 鵲の羽に霜ふり寒き夜を一人ぞ寝ぬる君を待ちかね

③⑧ 鵲の違ふる橋の間遠にて隔つる中に霜や降るらむ

③⑨ 鵲の行き合はぬつまの程寒みあかで別れし中ぞ悲しき

③⑦の「霜ふり寒き夜を一人ぞ寝ぬる君を待ちかね」や「好忠集」③⑧の「間遠にて隔つる中に霜や降るらむ」や③⑨の「鵲の行き合はぬつまの程寒み」等の表現から、独り寝の寒さが伝わってくる。「七夕」の恋人達の束の間の逢瀬の喜びの後には、非情な別れが待っている。来年まで長い独り寝が続くのである。

③⑧、③⑨の好忠の和歌に詠まれている情景は、七夕には天の河を填めつくし、羽を互い違いにして橋を作っていた鵲が一羽去り、二羽去り、鵲

の橋は絶えだえとなり、羽の間から白い天の河の見えていた様子である。「つまの程寒み」とは、七夕が過ぎて鵲がぼつりぼつりと去り、鵲と鵲の羽先羽先の間が寒いと詠んでいる。先に考察した『莊子』の「異鵲」の一对による橋ならば、二羽の羽先の端の間があくということはより自然に思い描ける光景である。

平安人はこのように一年にただ一夜の逢瀬が過ぎ、深まり行く秋に長い独り寝を歎く場面に美を見出した。

これらの和歌に直接影響を与えたかどうかはわからないが、「七夕」伝説を受容する姿勢が類似している李白の詩を紹介したい。

④5 擬古詩

青天何歴々 明星如白石

青天何ぞ歴々たる 明星白きこと石の如し

黄姑と織女 相去不盈尺

黄姑と織女と 相去ること尺に盈たず

銀河無鵲橋 非時將安適

銀河に鵲橋無し 時に非ずして將に安

閨人理紈素 遊子悲行役

閨人紈素を理め 遊子行役を悲しむ

瓶氷知冬寒 霜露欺遠客

瓶氷冬寒を知り 霜露遠客を欺く

客似秋葉飛 飄飄不言歸

客は秋葉の飛ぶに似て 飄飄として歸るを言はず

別後羅帶長 愁寬去時衣

別後羅帶長し 去時の衣を寛にせむこととを愁ふ

乘月託宵夢 因之寄金微

月に乗じて宵夢に託す これに因つて金微に寄す

内容

二人を隔てる冷たい白石のような銀河は一尺にも満たないのに、逢瀬

の時は過ぎて鵲の橋も無くなり、もう逢うことは叶わない。織姫と同じ

ように独り寝しなけれねばならない妻は夫のために衣を縫い、旅立たな

ければならない夫は別れを悲しむ。そして瓶の水の凍るのを見てまもなく来る霜露の寒さの厳しさに圧倒される。

ところで霜置く寒い夜、独り寝を歎きながら七夕の逢瀬を思い出しているという設定で、まず思い浮かぶのは『長恨歌』である。

④6 『長恨歌』

夕殿螢飛思悄然

夕殿に螢飛んで思ひ悄然たり

秋燈挑尽未能眠

秋の燈挑げ尽して未だ眠ること能はず

遲遲鐘漏初長夜

遅遅たる鐘漏の初めて長き夜

耿耿星河欲曙天

耿耿たる星河の曙けむとする天

鴛鴦瓦冷霜花重

鴛鴦の瓦冷やかにして霜花重し

旧枕故衾誰与共

旧き枕故き衾誰と共にかせむ

一略一

七月七日長生殿

七月七日長生殿に

夜半無人私語時

夜半に人無くして私語せし時

在天願作比翼鳥

天に在らば願はくは比翼の鳥作らむ

在地願為連理枝

地に在らば願はくは連理の枝為らむ

小鳥憲之氏は、平安人が長恨歌を受容する際には、独りになった玄宗が、七夕の比翼連理の誓いを七夕の日に思い出す、という理解をしていたと述べておられる。

④7 『散木奇歌集』 383 七月七日

鳥にとも木にとも昔契りしは今宵な星の逢瀬思へば

この歌は玄宗の立場で詠まれている。七夕に交わした比翼連理の誓いを、同じ七月七日に思い出したとして受容している。

④8 『土御門院御集』 秋 147 耿耿星河欲曙天

七夕もしばしやすらへ天の河あくるもおのがかげならぬかは

この和歌は、天が曙のように明るいの、二星が輝くからであり、夜

明けのためではない、だからまだ充分二人の時間があるから安心せよ、

と詠んでいる。

独りになった玄宗は比翼連理の誓いを思い出し、どちらかが亡くなれば残された方が死ぬという「鴛鴦」に心を遣り「鴛鴦の瓦冷やかにして霜花重し」と独り寝の寒さを意識し、「旧き枕故き衾誰と共にかせむ」と思う。その玄宗の心の有り様を、平安人は美しく切ないものとして受容しこれらの和歌を詠んだのだろう。

この場面を最も効果的に用いたのは、「源氏物語」であろう。「幻」の巻では、光源氏が紫の上を亡くし螢が飛び交うのを見て、「長恨歌」を口ずさみ、続いて七夕の時を迎えると、紫の上と過ごしたかつての七夕の逢瀬と、現在独りの我が身とを思い比べるという「長恨歌」と同じ趣向の場面が続く。

④⑨ 「源氏物語」⁽³⁶⁾ 幻

螢のいと多う飛び交ふも、「夕殿に螢飛んで」と、例の、古言もかかる筋にのみ口馴れたまへり。

夜を知る螢を見てもかなしきは時ぞともなき思ひなりけり

七月七日も、例に変わりたること多く、御遊びなどもしたまはで、つれづれにながめ暮らしたまひて、星合見る人もなし。まだ夜深う、一所起きたまひて、妻戸押しあけたまへるに、前栽の露いとしげく、渡殿の戸よりとほりて見たさるれば、出でたまひて、

七夕の逢瀬は雲のよそに見て別れの庭に露ぞおきそふ

「葵」の巻では、光源氏は、亡き葵の上を思い出し「長恨歌」を句題とした和歌を書き散らす。

⑤⑩ 「源氏物語」葵

「旧き枕故き衾、誰とともにか」とある所に、

亡き魂ぞいとど悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに

また、「霜の花白し」とある所に、

君なくて塵つもりぬるとこ夏の露うち払ひいく夜寝ぬらむ

この時光源氏が書いた「長恨歌」では、「鴛鴦の瓦冷やかにして霜花重し」の「重し」が「白し」となっている。これは「長恨歌」の本文の異文の可能性を示しているが、一方では、紫式部が独り寝の寒さと天の河にかかる橋となっていた鶴が間遠になる③⑧や③⑨のような和歌を背景に「白し」と積極的に改めた可能性もあると思う。

「長恨歌」本文では比翼連理の誓いを思い出している日を七夕とは規定していない。「長恨歌」にも「源氏物語」にも「鶴の橋」の語句は出てこない。しかし比翼連理の誓いを立てた日も、独りでそれを思い出している日も、共に七夕の日として「長恨歌」を受容していたなら、その日は「鶴」が橋をかける日であるという意識はあったと思う。

「七夕」説話は、逢瀬の後、七夕の日を思い出し、逢えない事を侘ぶるという設定が好まれ、「鶴の橋」もその設定の中で受容されてきた。

八

時代が下がるにつれ冒頭にⅠとⅡとして分類した「鶴」の詩歌はともに影響し合うようになっていく。次の『和漢朗詠集』所収詩句を紹介したい。

⑤⑪ 「和漢朗詠集」七夕

217

輔昭

詞託微波雖且遣 詞は微波に託てかつかつ遣るといへども

心期片月欲為媒 心は片月を期して媒とせんす

従来からの解釈は、片割れ月が今日が待ち望んでいた七夕の日であることを教えるために逢瀬の媒となるというものである。だが、もう一歩踏み込んで片割れ月つまり半月という表現に注目し、「破鏡」説話と結び付けて解釈したい。七月七日は月齢からみると半月であり、これを「片割れ月」と表現する点から「飛鶴」を想像させる。従って「片月」を鶴の喩えとすると、これを媒と解釈する発想は、半月が「鶴の橋」と

なつて二星を結び付けるといふ表現であると思われる。

『新撰朗詠集』「七夕」部に採られている菅忠貞の詩題も「破鏡」説話と「七夕」伝説が結び付いた例である。

⑤② 『新撰朗詠集』七夕 199

月為「渡河媒」^{なかつち} 菅忠貞

似告前行臨浪夕 前行を告ぐるに似たり浪に臨む夕

欲迷歸路隱雲秋 歸路に迷ひなむとす雲に隠るる秋

この「月は渡河の媒と為す」といふ表現は、⑤①の例と同じである。これも七日の月だから半月、半月であるため「破鏡」説話の「飛鵲」と結び付き、鵲といえ「七夕」の「鵲の橋」、だから二星の逢瀬の媒といふ連想である。また詩句の「雲に隠るる」といふ表現からも飛んでいる鵲が連想される。

一方、和歌においても時代が下がるにつれ、Ⅰ・Ⅱを共に踏まえた「鵲」の例が現われてくる。

⑤③ 『秋篠月清集』院第二度百首・夏十五首 826

鵲の雲のかけはしほどやなき夏の夜渡る山の端の月

⑤④ 『新拾遺集』秋下 421

家十五首歌に、月

為家

天の原光さしそふ鵲の鏡と見ゆる秋の夜の月

良経の⑤③の和歌は下の句の「夏の夜渡る山の端の月」から、⑤④の千里歌「鵲の峰飛び越えて鳴きゆけば夏の夜渡る月ぞ隠るる」の影響下にあることがわかる。しかし⑤③の和歌では、「短歌行」や「破鏡」説話だけではなく、「七夕」伝説の「鵲の橋」の発想も用いられている。それは上の句の「鵲の雲のかけはしほどやなき」の「ほどやなき」といふ表現からわかる。これは「鵲の橋」がかかる秋の七夕の日まで「ほどやなき」といふ意である。よってこの和歌は、Ⅰ・Ⅱの二つの分類の鵲の受容を一首の中に詠み込んでいるのである。

⑤④の和歌を詠んだ為家も「月」といふ題から、七月七日の秋の月を連想し、「天の原光さしそふ鵲の鏡」と表現している。これも七月七日が半月であり、よって「破鏡」説話の「鵲の鏡」と結び付くという趣向を眼目としている。「七夕」伝説の「鵲の橋」と「破鏡」説話が影響し合っ

て生まれた表現なのである。

以上、平安詩歌を中心に「鵲」の用例を見てきた。冒頭でまとめたように「月」と組み合わせられる場合と、「七夕」伝説の「鵲の橋」という二つの観点から受容の変遷を辿ってきた。その結果、月との組み合わせに関しては「短歌行」と「破鏡」説話が典拠であり、『李嶠百詠』『初学記』等によって受容されたことがわかった。「七夕」伝説の「鵲の橋」に関しては、特に「霜」とともに詠まれることに注目し、その背景に「七夕」伝説の日本の受容があることを考察してきた。

「鵲」は、これらを背景に詩人歌人の創作意欲を刺激し、数多くの詩や歌の中に詠まれていったのである。

注

- 1 蔵中スミ氏「かささぎの橋」―詩語から歌語へ―（「帝塚山学院短期大学研究年報」、第二十三号、昭和五十年）。
- 2 本稿の引用和歌は、基本的に新編国歌大観の本文によるもので、表記については、適宜私に改めた。
- 3 注1の蔵中論文では、これらの観点のうち「月」と「鵲」の組み合わせの典拠の一つとして、魏武帝「短歌行」を紹介された。また「鵲の渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける」という家持歌に注目され、「鵲」が「霜」と結び付く特徴を持つことに言及されている。
- 4 「破鏡」説話については、新聞「美氏が、『大和物語』蘆刈説話の原拠について―本事詩と両京新記―」（『甲南大学紀要』文学編80、国文学特集、平成三年三月）の中で「本事詩」の例を含め、紹介されておられるので、参照されたい。

- 5 柳瀬喜代志氏編著『李嶠百二十詠索引』（平成三年三月、東方書店）。本文ではこれを基に引用し、適宜私に改めた。
- 6 新聞氏は、注4論文の中で「破鏡」説話に関して源英明の例を挙げる。なお、「織月賦」の「飛鵲猶慵」の「飛鵲」を柿村重松氏『本朝文粹註釈』では、「七夕」伝説の鵲とし、新聞氏は「破鏡」説話による「月」とするが、直接には『初学記』の「魏鵲飛」を典拠としたものと考ええる。
- 7 同歌は更に、「赤人集」に「かぜのふく」の題で「鵲の峰飛び分けて飛びゆけばみやま隠るる月かとぞ見る」という異文がある。
- 8 金子彦二郎氏『平安時代文学と白氏文集―句題和歌、千載佳句研究篇―増補版』（昭和三十年六月、培風館）。
- 9 『句題和歌』には同じ「入朝洛堤歩月」詩から「蟬去野風秋」の詩句を題とした「なく蟬の声高くのみ聞こゆるは秋すむ虫の秋ぞしるらし」（類従本句題和歌）がある。なお（書寮部蔵大江千里集）では下の句「野にふく風の秋ぞ しらるる」となっている。
- 10 但し『新撰万葉集』下巻の漢詩句には疑問があるので、ここで「鵲鏡」と表現されたことが、直ちに当時の解釈とは言い難い。
- 11 三木雅博氏編『紀長谷雄漢詩文集並びに漢字索引』（平成四年二月、和泉書院）所収。
- 12 本稿中の「菅家文章」は、基本的に古典文学大系本により引用したが、私に適宜訓を改めた。
- 13 「星稀にして鵲を遶らせども、花嬾くして蜂を期せず」という表現は、英明の「飛鵲猶慵」に影響を与えたかと思われるが、これら「嬾」「慵」に類する表現は白詩に特徴的に見られる表現である。小島憲之氏『古今集以前―詩と歌の交流―』（昭和五十一年二月、塙書房）参照。
- 14 川口久雄氏は、「春管」を「春の笛の音律」と解釈されているが、ここでの意は、易経の気を候う法の管律を指すと思われる。四方を巡らした中で案の上に管を並べそこに灰を置き、その灰が散じれば気の到来を告げるというものであり、この場合は、少しでも早い春の到来を願う表現と解釈すべきであろう。
- 15 『和歌童蒙抄』の「古歌」については、山田洋嗣氏が著者範兼が、典拠にあわせて和歌を自身で創作し、古歌としたという説を述べておられる（『和歌童蒙抄』の注釈―「古歌」の問題を中心として―『和歌文学研究』第四十九号、昭和五十九年九月）。
- 16 注1蔵中論文参照。
- 17 この淮南子は逸文である。
- 18 この指摘は、松浦友久氏もなされている（松浦友久氏『中国名詩集―美の歲月―平成四年七月、朝日文庫）。
- 19 運寸とは、一尺のことである。
- 20 山崎誠氏「身延文庫蔵和漢朗詠註抄影印並びに翻刻」（鎌倉時代語研究）第五輯所載、昭和五十七年五月、武蔵野書院）。なお、同影印の存在については、三木雅博氏の御教示を得た。
- 21 小島憲之氏「七夕をめぐる詩と歌」（『上代日本文学与中国文学』中巻第九章、昭和三十九年三月、塙書房）。この小島氏の説に基づき吉川栄治氏は平安朝和歌での「七夕」の渡河について「雲」や「紅葉」の橋が詠まれていると指摘された。吉川栄治氏「平安朝七夕考説―詩と歌のあいだ―」（『中古文学と漢文学』、和漢比較文学叢書3、昭和六十一年三月、汲古書院）。
- 22 注1蔵中論文参照。
- 23 『大和物語』は新潮日本古典集成本を引用した。
- 24 『白氏文集』の番号については、花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』所載「綜合作品表」による。『白氏文集』の訓みについては、基本的に続国訳漢文大成『白楽天詩集』に従い、適宜改めた。
- 25 能宣は「鵲」と「鶴」の取り合せでこの他にも和歌を詠んでいる。「七月七日、人々よみはべりしに、鵲の橋のみならず天の川雲居に渡す鶴も住むめり」なお、②⑨の和歌の「たつ」に対し、注21の吉川論文では、『神仙伝』等の「七月七日」の項の「五龍」の記事を引き、「たつ」は「龍」の意とされたが、本歌は、特に詞書きに「つる」と示されているため「鶴」と判断した。
- 26 「身延文庫蔵和漢朗詠抄」『七夕』部にも「風土記―略―或云見天漢中有奕々白氣以此為」の記事が見られる。
- 27 この和歌の異文が、『新古今集』85に採られている。「夜や寒き衣や薄きかた

そぎの行き合ひの間より霜や置くらむ」。

28 本文は、『私家集大成』Ⅱによる。Ⅲは四・五句が「一人かねぬる君を待ちかね」となっている。

29 この外にも『懷風藻』56には出雲吉智首の「七夕」詩「一略一、仙車渡二鵲橋一、神駕越二清流一。天庭陳二相喜一、華閣积二離愁一。河横天欲レ曙、更歎後期悠」という同じ趣向の詩が詠まれている。

30 この点については新聞一美氏の御教示を得た。

31 この李白と同じように妻が独り寝を「七夕」の逢瀬の後の織姫に託して詠んだ詩が『経国集』十四にある。

七言。秋月夜。一首

滋貞主

輕簾朗卷夜窓靜。孤月閑來泛二南端一。白兔因レ莫雲葉霽。恒娥竊レ葉仙居寒。渡レ河未レ見候輪濕。写レ鏡徒憐秋扇團。承レ袖攬レ之不レ盈レ手。為レ無二纖陰一通霄看。圓規滿輝寢区飛。陰魄生來二八時。長梁鐘声伝レ漏久。衡陽鴈影下レ水遲。孤飛夜鵲檐枝怨。暗織昆虫機杼悲。賤妾单居不二肯寐一。風吹二砧杵一入二双扉一。年來歲去容華空。古往今來月影同。上郡良家戎津遠。辺庭蕩子塞途窮。貞筠不レ變緑窓色。暮柳先疎官路風。明月如レ非レ照二妾意一。那堪秋夜暗閨中。

32 長恨歌本文は新潮古典集成『源氏物語』一の巻末に付けられた『金沢本白氏文集』を元とするものに拠った。

33 注21小鳥論文参照。

34 この詞書きの全文は「七月七日孝清がかつらの山里にて帥中納言基綱をはじめて歌よまれけるに」というものである。

35 『古今注』「鴛鴦」部に「鴛鴦水鳥鳬類、雌雄未嘗相離、人得其一、則一者相思死、故謂之正鳥」という記事がある。

36 本文は、新潮古典集成『源氏物語』による。

付記 本稿は、平成七年度科学研究費補助金「平安時代中期から鎌倉初期における『和漢朗詠集』受容の研究」による研究成果の一つであり、平成七年十一月二十六日、神戸大学で開かれた和漢比較文学会第十四回大会において発表したものをまとめ直したものである。席上、新井栄蔵氏、三木雅博氏、佐藤道生氏、小林

徹行氏等の方々に有意義な御教示を頂いた。ここに厚く御礼を申し上げます。

また本稿を執筆するにあたって、新聞一美先生に数々の御教示を賜りました。御礼申し上げます。

なお、本稿の重要な参考論文を執筆された蔵中スミ氏は、本稿執筆中、平成七年十一月五日に御他界されました。ここに心からの御冥福を御祈り申しあげます。